

創立者と学生の絆—自身の体験を通して—

石 井 秀 明

皆さんこんにちは。今ご紹介がありましたが、短大の学長をさせていただいています、石井と申します。昨年の4月に、学長の大任を拝しまして1年数ヶ月となります。その重責を果たせているかどうか反省の日々ですが、自分なりに一生懸命に挑戦をさせていただいております。本日は、神立所長の言われている趣旨にかなうかどうかわかりませんが、私の体験を通して創価大学の草創期の話をしていただきたいと思います。

先ほどお話があったように、私は新潟から創価高校の1期生として入学をいたしました。当時、わが家は経済的に大変な状況で、お金の余裕などありませんでした。そうしたなかで創価高校を受験させてもらいました。受験日が確か、2月15日です。前日、父親と一緒に新潟から出てまいりまして、全ての試験が終了して帰る頃になると、雪がかなり降ってきて、東京は大雪になったんです。新潟も大雪だったように思います。当時は上野駅から新潟に特急が走っていました。「とき」という名前の特急です。急いで二人で上野駅まで行き、その特急「とき」に乗ったんですけれども、出発時刻を過ぎても動かないんです、大雪で。本来なら夜には自宅に着く予定だったんですけれども、全然動かなくて、動き出したのは午後11時くらいでした。そして未明に、やっと新潟の最寄りの駅に着きました。

ご存じのように、一定の時間、電車が遅れますと特急料金の払い戻しがあるんですね。鮮明に覚えているんですが、父親が特急料金の払い戻しを、にこにこして受け取っていたんです。そんなに嬉しいのかなと思いが、父の姿を見ていました。かなりあとになってからわかったことですけれども、私を東京に連れていき、一泊して入学試験を受けて帰ってくる電車賃と宿泊代、そのお金が、家にある現金の全てだったそうなんです。その事実を、受験から10年後くらいに聞いたのですが、本当にそういう大変ななかで受験をさせてもらったんだということを改めて感じたことがありました。今は、心から感謝をしておりますけれども、そういう状況のなかでしたから、創価高校に合格できたことを、私以上に両親が喜んでいました。

創価高校に入ってやりたかったこと、それは野球で甲子園に行くことだったんです。中学時代、野球ばかりやっていたので、これが私の夢だったんです。創価高校なら全国から、頭だけでなくスポーツも優秀な人が必ず集まると信じていたんですね。私を除いてですけど、そして、みんな真面目だろうから、一生懸命にやれば夢は必ず実現するんだ。いや、できるはずだ。だか

Hideaki Ishii (創価女子短期大学学長)

*本稿は、創価教育研究所講演会での講演(2010年6月23日)に加筆・訂正したものである。

ら、野球部を創って、3年のうちに甲子園に行く。そうすれば、池田先生も喜んでくださるし、私も嬉しいし、学園に行った甲斐があると。そういう何か勝手な思い込みがありました。そういうわけで、お金がないなか、親にただ1つ頼んだのは、新品の野球のスパイクを買ってもらいたいということでした。それだけは買ってもらったんです。私はそのピカピカのスパイクを抱えて学園にまいりました。ところが、開校時の学園には野球のグラウンドがない。あるのは桑畑という現実だったんです。そしてクラブ活動は毎週水曜日の放課後しか許されなかったのです。それ以外はクラブ活動をやってはいけないという、学園の徹底した英才主義。そしてまた、対外試合は一切認めないということもありました。整備されたグラウンドはありませんから、当然、硬式の野球はできません。練習試合も禁止。水曜日1日だけの練習。これで甲子園に向けて何ができるのかと絶望的になるのは当たり前で、大げさですけど、私は学園に来た意味の大半を失ったような思いになったんです。その事実を、私自身が感じとって、諦めて受け入れたその晩は、寮の布団のなかで涙を流しながら泣いていました。そういうことはありましたけれども、まあ、しょうがないと思って、栄光寮の前に球場めいたものができた時に、私が高校の野球部を創りました。軟式野球です。神立さんが中学校の野球部を創って、両方キャプテンをやったんですよね。そして、高1と中1と一緒にグラウンドで練習したんです。とはいっても、高1の私たちは甲子園という積極的に目指すものがないんです。ならば後輩を育てようと、こういう風に考えを変えまして、中1の皆さんを鍛え始めたんです。ちょっと体力差はあるんですけども、ノックで鍛えるんです。中学生をバックネットの前に立たせてボールを後ろに逸らしてもネットでちゃんと止まるようにして、ノックの特訓をやったりしていました。神立さんには、その特訓のことを、「高校生が手加減もしないで本当に怖かったんですよ」と、いまだに責められています。

また、学園の寮生活も過酷でした。ストーブのない、いわば暖房のない冬の寮生活を1年目に経験をしました。合宿所という名目で栄光寮を造ったそうですので、暖房は一切使えない。40数年前の小平の寒い冬ですから、午後11時くらいになると勉強部屋の窓が凍るんですよ。そして開かなくなるんです。「あー、今日も凍っちゃったねー」とか言いながら、私たちは、毛布を腰に巻いて、オーバーを着て、そして手袋をはめて、手袋だと鉛筆が持てないので手袋の先を切って指が出るようにして勉強していたんです。とにかく寒いんです。冬のある朝、顔を洗うのに外の洗面所に行ったら横なぐりの雪が降ってしまっていて、そして水道をひねったら、凍っていて水が出ない。仕方なく顔も洗わないでもどってきたこともありました。そういう冬を乗り越えたのも、今は良い思い出です。

話はここから創価大学のことになるのですが、そうした厳しくも温かい寮生活と学園生活を経て、創価大学の経済学部に入學をいたしました。当時は学園からの推薦制度もありませんでしたので、私たちも一般入試を受けました。経済学部は約15倍だったと思います。今日いらしている山崎純一先生の文学部は25倍で大変だったと思うんですけども。実は、私は大学の願書を創価大学の経済学部1つしか出していなかったのです。それで試験直前に学園の担任から「石井！」と呼ばれて、「君は大学には1つしか願書を出していないけれども、落ちたらどうするんだ」って言われたんです。落ちるということをあまり考えていなかった私にとって、非常にインパクトの

ある言葉でして、「本当に落ちたら浪人するしかないんだなあ。だったらもう1学部受けておけばよかった」とその時思ったのですが、もう遅かったんです。おかげで、試験の前日は、とても緊張して寝付けなかったことを覚えています。おまけに寮ですから、早く寝た人のいびきがものすごくて、朝までほとんど寝れなかったんです。ちょっと朝方寝て、創価大学の経済学部の受験にまいりました。そういうなかで受けたんですが、いい感じで頭が冴えていまして、ある程度問題は解けたなあと思って帰りました。そして発表の日、学園仲間と大学まで見に来ました。当時は合格者の受験番号を掲示で張り出していくんです。自分の番号を見つけた時はやっぱり嬉しかったです。合格できたんだなあという喜びがありました。

私は、晴れて創価大学の1期生として入学できたわけです。寮にも入りました。北寮の9号室です。山崎さんは北寮の10号室。当時は、12人で1部屋でした。とにかく、にぎやかな寮生活でした。寮生活そのものは、いろんな出来事がありました。いずれにしても12人で1部屋ですから、いろんなことが起こって当たり前なんですけれども。実は、1期生が書いた卒業記念文集で『草創』というのがあります。昨日読んでいたら寮生活のことを綴っていた箇所がありました。こんな部屋があったのかと私もはじめて知ったのですが、寮生は朝起きるのが一つの課題でしたから、ある部屋は、「朝起こし当番」なるものを設けたらしいんです。朝の起こし役を設けたわけです。室員が12人でしたので、12日に一度の早起きぐらいはできるだろう、というふうにして皆が知恵を出してそう決めたらいいんです。明日お前、明後日お前だよ。ところが、これが大きな誤算で、起こし当番が起きてこない。12日に1日だったら大丈夫だと考えたのに。だから、その起こし当番を起こす当番が必要となってきて、それを設けたそうなんです。真剣にこれも実行してみました。しかし、誤算は誤算を招いてついには失敗に終わる。こういうことが当時の寮生活の様子として書かれていました。うちの部屋はそういうことはやりませんでしたが、そんな部屋もあったということです。だから、1限目の授業を寝坊して遅れたり休んだりした人は寮生には多かったように思うんです。私もその一人でしたけれど。

そして、生活面の眼目は何といっても食料の確保でしたね。今みたいに学生ホールとか、コンビニなど周りには何もありませんので、食料の確保には苦労したんです。ラーメン、それもインスタントラーメンをよく食べていましたね。卒業記念文集『草創』にも、こんな素晴らしい文章が載っていました。それは、「ラーメン学生とはよく言ったもので、この点においては確かにソクセキを残した」と。草創期ならではの表現ですね。また、こんなことが書かれていました。ある寮生が1日のアルバイト代をそっくりラーメンに費やし、大きな箱を抱えて帰ってきて、これで俺は生き延びるんだと豪語していたらしいんです。ところが3日もするともう部屋の住人といわず、他の部屋まで行って1個10円でいいから、と売りさばいていた。ラーメンそのものに飽きて、さすがにまいったという話です。まさに、当時の寮生活の雰囲気が伝わってくるエピソードです。

話は変わりますが、創立者池田先生は第1回入学式には来られませんでした。「僕はこの4年間何をすればいいんだろう。創価大学に入ったけれども、創価大学に貢献するというか、何かに役に立つ4年間でどう送ったらいいのだろうか」。これは私自身がかなり悩んだことです。他の1期生もそうだったと思います。4月、5月頃は、自分でも悶々としていたんだと思います。勉強は

もちろんですが、新しい創価大学をつくるために何をしたらいいのか。あるのは校舎とカリキュラムと授業。当初は、クラブも何もないわけですので、何をやったらいいのか自分自身に問いかけていたんですけれども、なかなか答えは出ない。また、寮は12人1部屋ですから、実ににぎやかな集団生活でした。毎日のように誰かが買い出しに八王子のダイエーまで行って、いろんな食材を買ってくるんですね。そして、「今日もまた食事会（宴会？）をやるから参加する人はいるか」と、皆に呼びかけるんです。そこで割り勘にして、寮の部屋にある6畳くらいの和室に集まって、食事を囲んで思い思いのことを語り合いながら過ごすような日々が相当続きましたね。寮には門限はありませんでしたので、深夜1時、2時にバイトを終えて帰ってくる人もいましたね。みんなで「ご苦労さん！お帰りなさい！」と言って、その歓談の場に誘うんです。寮は、本当にいろんな人がいたんです。非常階段を昇りながらベランダ越しでうちの部屋に入ってくる寮生もいましたし、夜はほとんど寝ないで朝方寝る人もいたし、朝になると、よせばいいのに、「朝だー！」と大きく叫ぶ人もいたんです。これは本当の話です。「朝だー！」とうるさいんです。中寮、東寮、南寮の方から聞こえてくる。「もう叫ぶなよー」って皆が言い返す。私は北寮でしたからちょっと離れているんです。質実剛健というか、常識外れというか、ともかくにぎやかな寮生活と4月、5月の学生生活でした。

私自身は、ともかく創立者が開学前の設立構想でおっしゃっていた、「創価大学は皆さんの大学であります。（中略）皆でつくり、皆で勉強し、そして次代への偉大な遺産としていきたいのであります⁽¹⁾」。これが頭に入っていたんです。それと、「創価大学は、学内の運営に関しても、学生参加の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたい⁽²⁾」。当時、大学紛争が日本に吹き荒れ、教員あるいは大学当局と学生が対立をし、学生によってキャンパスが封鎖されるなど、ほとんど大学そのものが機能していない深刻な事態になっていました。そういう状況のなかで、池田先生は創価大学を設立されたのです。本来1973年の設立予定のところ、2年早まりました。大学紛争で大変だ、こんな時に悠長にやっていられない。新たな大学を創るのだとのお考えで、1971年、すなわち私たち創価高校の1期生が大学に進むその年に、創価大学の開学を早めてくださいました。そのおかげで私たちは入学できたのです。当初は、1973年に開学予定でしたから、3期生が本来は1期生になる予定だったんですね。これは、あとでまたお話ししますが、1期、2期生は何もないところから、それこそ手探りで歴史を創りながら、3期生を迎えました。そして、第3回入学式は、大学の公式行事に初めて創立者をご出席される歴史的な日となりました。その意味で、3期生は特別な思いを抱いていたようです。3期生は1期生に対して冗談めいてこういうことを言っていたんです。本来、皆さん方はいなかった人だと。1期、2期生にです。私たち3期生の入学する時が本当の開学の年だった。そういう意味で私たちが本来の1期生である、と。3期生は、いい意味でそういう誇りをもっていましたね。本来の開学の年に集い、そして創立者が入学式に初めてご出席された。この年から本当の大学建設が始まるんだとの息吹と情熱が満ちあふれていたことは確かです。

⁽¹⁾ 「第32回創価学会本部総会」『創立者の語らい I』、1995年）29頁。

⁽²⁾ 同上。

話は戻りますが、入学してから、何をすべきか悩んでいた私でしたが、5月の初旬頃にあるビラが目に入ったんです。B5サイズくらいだったでしょうか。同様の内容が寮を出たところに掲示されていたのも記憶していますが。主旨は「学生自治会を設立しよう」との呼びかけのビラなんです。うろ覚えなのですが、「理想実現に向けて、何ものかを生み出す創造的な場の創出を」。ちょっと時代めいた表現ですが、「何ものかを生み出す創造的な場の創出を」と、こういうふうに書いてあったんですね。それが私にとっては、すごく新鮮な響きがありました。何ものかを生み出していく創造的な場、それが学生自治会である。この学生自治会というのは全学生を構成員とするものであり、理想的な学園共同体を目指していくことになるだろうと思ったのです。そういう意味では全学生の意見を集約できる。全学生を代表できる組織があれば、創立者が設立構想で掲げられた学生参加の原則、そして教職学一体はもとよりですが、学生が中心となって大学を創っていくことができる。そのための学生自治会を作れば、創立者が理想とする大学建設の原動力となることができるのではないかと。こういう考えが私の胸のなかにストンと入ってきて、すごく納得をしたんです。その日のうちに発起人のところに行きまして、私もこの運動に参加をさせてもらうことになりました。こうしたきっかけで、学生自治会の設立という活動に入ってきました。それが5月初旬の出来事です。1期生として創価大学に入り、自分という人間が4年間この草創期の大学にいて、何かを成し遂げ、何かを残し、何でもいから納得できるような大学貢献の働きをしたい。自分自身にそう問いかけ悩んでいましたので、何か答えを見出したような、わくわくする思いで、その日から学生自治会の設立に全力で取り組んでいくことになったわけです。

具体的には5月下旬に、学生自治会設立準備会議が発足をすることになるのですが、実にさまざまな人がこの運動に加わっていました。寮の一室が発起人達の拠点になって夜遅くまで打ち合わせをやっていましたね。北寮9号室の私の一室も、そのあと使われるようになったんですが、関係のない寮生にとってみれば、知らない学生が集まってきて遅くまでいるんですから、迷惑なことだったと思います。そこでは、具体的な設立準備活動をどうしたらよいか、どう創大生に呼びかけたらよいか、真剣な討議が繰り返されていたんです。というのも、あの大学紛争の時は、各大学にある自治会組織が1つの運動の主体となっていたわけです。ある意味では、政治的イデオロギーをもった学生達がセクトをつくり、自治会という組織を利用して学生に訴え、学生を結集し、その資金を活用して、国家権力の象徴としての大学当局と対決していったという構図が、学生運動にはあったんです。

創価大学が開学した1971年は、そうした大学紛争がようやく終局を迎える頃でしたが、学生自治会と聞くと、誰もが大学と対立する存在だというイメージを強く持っており、自治会そのものに拒否反応を示す人が多かった時代だったのです。ですから、これから作る創価大学の学生自治会は根本的に違うんだ、新しい学生自治会なんだということを皆さんに訴えるビラを書いて配っていきました。ビラを書くにも、当時は今のようにワープロやパソコンなどありません。全部、ガリ版刷りでした。ガリ版用紙を、それこそガリガリ削って文字を書き、インクをつけて一枚ずつ刷っていました。それを寮の一室でやりますから、部屋中にあの独特のインクの臭いが充満す

るわけです。夜を徹して一枚ずつ何枚も何枚も刷るしかないので、結構時間がかかります。刷り終わって、朝8時過ぎになるとブロンズ像の前に行って、「おはようございます」と声をかけて、皆に学生自治会設立を呼びかけるビラを撒くんです。そういうことを毎日、毎日、繰り返していました。当時は正面ロータリーにバス停がありましたので、大学の中までバスが入ってきていたんです。通学生はバス停から降りてきますから、ブロンズ像前がビラ配布の最適の場所でした。寮生も全部カバーできましたね。ただ問題なのは、1限目開始の9時を過ぎて遅れてくる学生がいるんですよね。ビラを徹底して配るために、遅れてくる学生のために何名か残らなくてはいけないわけですね。私も朝9時から授業のある日があったんですけど「俺が残るよ」と言って、授業が始まってもビラを配る時があるわけです。そしてクラス仲間が、「石井。お前、今日も1限目は来ないのか」と。私は「悪いな」とか言いながらビラを撒き続けていた、ということもありました。この点、模範的な学生ではなかったようですね。

こうした地道な運動を続けるなか、「自治会を作るべきか否か、必要かどうか」ということを旧S201教室で討議したり、議論したりしました。そういうなかで、ある日の放課後、S201で自治会設立のための討議集会を開催しました。学生が集まってくれなければ話にならないわけで、ぜひ多くの学生に参加してもらいたいというのが主催者の願いです。以前に、山崎さんも講演会で話していたのですが、午後4時半くらいから集会を開始するのですが、ちょうどその時間に正面ロータリーから帰りのバスが出るんです。その日、満員の学生を乗せたバスが出発していくんです。まさにS201の前を通して。私も血気盛んだったので、そのバスに向けて「何で帰るんだー！」と叫んだんです。「何で帰るんだー！これから大事な討議をするんだぞ！大学建設のために残れー！」と、走りながらバスを追いかけて、学友に向かって叫んでいました。そんなこともありましたね。そういう活動を経て、6月中旬に、学生自治会設立準備会議が主催して、昔の野音（野外音楽堂）を会場に第1回全学集会が行われました。学生自治会を設立する方向でいくかどうかということを討議する初の全学集会でした。その時、どういう経緯かわからないのですが、私がある議長のを務めたんです。何のための自治会なのかという観点からいろいろ議論が出ました。やっぱり反対意見や慎重な意見もありました。学生組織は必要だが、万が一、悪い人がそれを牛耳ったら創価大学そのものが破壊されてしまうことになるのではないか。そういう恐れはないのか。だから今は時期尚早であり、自治会を作る必要はないんじゃないかという意見もありました。自治会がなくても、皆が全員このような形で集まってやっていけばいいんだというような意見もありましたね。しかし、学生全体を代表する組織がなければ、大学にも正式に意見が言えないんじゃないか。創立者とともに歩むにしても、そういう組織がなかったら何もできないんじゃないか。こういう議論も当然あるわけです。私はそういう考えをもっていたので、全学集会の議長の立場で「学生自治会をつくる方向でいくべきだ」という主旨の発言をしたんです。そうしたら、野音の上の方からヤジが飛んできたんです。「議長は中立であるべきなんだ。意見を言うな。お前は黙っている」と怒鳴られました。それこそ、皆、真剣だったんです。結構、血気盛んな1期生でしたので、夏の日差しが照りつけるなか熱い議論を戦わせて、最終的には自治会設立の方向で検討していこうということが確認されたのです。ただ、具体的にいつ、どのように正式に自治会を作る

のかは決まっていないわけです。そういう意味では、それから設立準備会議として、毎晩のように、自治会をどういうふうにして作ったらいいのかを議論をして、ビラを書き、ビラを撒く活動を続けていました。

夜中はお腹が空きますから、お米を炊いたこともありましたね。おかずは全くないので、塩をつけたおにぎりを作るんです。これが本当においしいんです。本当にうまい。こんなにうまいものかと思って食べていました。塩をつけただけのおにぎりでも皆お腹がすいていますし、本当においしかったなあ、と今もってその味を覚えています。それで、6月頃になるとですね、朝の4時くらいから夜が明けてくるんですね。寮のベランダから遠く山なみが見えるんです。濃い紫色の山なみと暗い空がだんだんと薄紫色に変わり、一瞬にして山の端から朝日の陽光がパーっと出てくるんですよ。その時間まで私たちはだいたい起きていますから、それを寮のベランダから見るんです。薄紫の空が朝日に染まり、輝く陽光に照らされて荘厳な夜明けを迎える。その瞬間にある人がつぶやくんですね。「これは、21世紀を開く創価大学の未来の夜明けを意味しているよな」と。ちょっと私たちには似つかわしくない表現で申し訳ないですが。そして、皆も「そうだ、そうだ」とうなずく。本当にそう思えたんです。「この夜明けは21世紀を開く創価大学の夜明けなんだ」と。我々がここで、ビラを作ったり、刷ったり、議論したり、いろんなことをやっているけど、すべては創価大学の未来を開くためにやっているんだという思いが、全員の心そのものでした。本当に私たちの胸のなかには、そうした燃え上がるような情熱がありました。夜明けの瞬間の感動は、今も忘れられません。

結局、学生自治会は、その年の12月から翌年の1月に設立のための全学署名を行い、学生の賛同のもとで執行委員長選挙を経て、開学1年目の2月に正式に設立されました。つまり、1期生だけの時に誕生したわけです。私は、その執行委員会の一員になりました。3年の時には学部体制がつくられ、経済学部の委員長になりました。委員長選挙は2年生の後輩との選挙戦になりました。お互い演説などで競い合いながら頑張り、私が最終的に当選したんですけれども、良い経験だったと思っています。話はそれますが、学部の委員長になったその秋にゼミ対抗野球大会を開催したんです。ここでまた野球が出てくるんですけれども、ゼミ同士で野球の対抗戦をしたんです。経済学部です。そうしたら法学部もこれは良いと言ってやり始めたんですね。放課後、各ゼミがトーナメント方式で野球をやるんです。私のゼミは非常に強かったんです。私はピッチャーをやりました。当時、北先生がまだ若くて、学生と一緒にプレーをされたんです。私のゼミと北ゼミが対戦することになり、私はピッチャーでしたから、北先生に対してもカーブを投げたりして確か三振をとったんです。ゼミの勝負にも勝ちました。北先生は、そのことをいまだに言うんです。「あの時は本当に悔しかった」って。僕らも本気でやっていたので、教員であろうが関係ないと。放課後は1試合しかできませんので、数日間、連続で試合をやりました。放課後になると試合のあるゼミ生はミットを持ち、バットを持って野球ができるグラウンドまで走ってきました。A棟入口に経済学部のゼミ対抗野球大会のトーナメント表を貼って、何対何で勝ったとか、皆に報告しながらやっていたので、すごく盛り上がりました。経済学部は私のゼミが優勝しまして、嬉しいことに私が最優秀選手になったんです。トロフィーをいただいたその時の

写真が残っています。そうして法学部の優勝ゼミと対戦をして、経済学部の子たちのゼミが勝ったんです。こんなこともやっていました。それも草創期の楽しいひとときだったと思います。

自治会のことはまたあとで触れますが、開学したその年の11月下旬に第1回の創大祭が開催されました。創立者が学生行事に初めてご出席してくださったのです。「学生の皆さんの招待ならば、必ず行きます」との創立者の思いに、学生が一丸となって立ち上がって創りあげた創大祭でした。創立者になかなか来ていただけない状況がありましたので、学生は必死でした。創大祭では、私は企画の部門に入りまして、1期生全員と創立者が集う場をどうやって作ろうか皆で苦心しました。ここは知恵の出どころでした。今、解体されている中央体育館で「記念フェスティバル」をやろうということになりました。池田先生に来ていただいて、何もなしで、「先生お話しください」というわけにはいきません。これは無理だと。だったら何かフェスティバル風のをやって、私たちの情熱、意気込み、決意を創立者にご披露して、そしてお話をしていただけるような集いにしようじゃないかという思いがありました。最終的には、記念フェスティバルの形式で、当時のクラブの演技や演奏などを見ていただきました。私たちの演技等が終わり、池田先生がお話をしてくださいました。実は今回、草創期のことを語るということで、『新・人間革命』の「創価大学の章」を読み返してみました。本当に創立者の思いの全てが凝縮されて綴られていました。池田先生はこういうふうに書かれているんですね。ちょっと読んでみたいと思います。「すべての展示を見て回った山本伸一の体は、疲労の極にあつた。足は棒のようになっていた。彼は、総本山での行事に出席し、寸暇を惜しんで原稿の執筆にあたっていたが、この日、時間をこじ開けるようにして『創大祭』にやって来たのだ。首も、肩も、凝り固まり、腕を上げようとすると、ボキッと音がした」。そして40展示くらい全部見てくださった上で、これからフェスティバルに行くよと言われる。同行の幹部が「ご出席になりますか」と聞いた時に、先生は「当然、出席します。最も敬愛する創大生に招かれ、皆を励ますために来たんです。たとえ、倒れようが、全力を振り絞って、私は皆と会う」と。こう答えられて、私たちの待つ体育館に来てくださった。そして、「私は、皆さん方に、偉大な人格をもつ人として、相對していきたい」と言ってくださいました。また、「いささかたりとも皆さんを“生徒”程度⁽³⁾」、私は「子ども」というふうに記憶しているんですが、「“生徒”程度の扱いにはしたくない。私よりも何十倍、何百倍も偉い無限の可能性を秘めた人格者であると、私は心の底で尊敬しております」と言ってくださったんです。これからは決して子ども扱いはしない、立派な大人として相對していく、という先生のお気持ちとお言葉は、私にとって非常に大きな意味を持って心に突き刺さりました。ああそうなんだと目の覚めるような思いでした。もう学生として、大人として、自立をしなくてははいけない。とにかく人を頼ることなく、全部責任を持って生きていかなければいけないんだと。そして、創立者は對等に私たちを見てくださっている。また、對等に見てくださりながらも、より理想の人格、人間へと私たちを高めていこうとしてくださっている。それは、ある意味では、創立者と学生の共同作業のなかで新しい大学を創っていこう、君たちこそが主役だよ、先駆者なんだよと。そういうこと

(3) 「第1回創大祭記念フェスティバル」『池田大作全集 59』18頁。

を言ってくださっているのだと感じたのです。この言葉は私にとって「責任をもって生きよ」という意味で、深く心に刻まれた言葉になりました。

それが第1回創大祭の一つの思い出ですけれども、翌年は第2回創大祭が行われまして、今も歌い継がれている学生歌が誕生しました。その経緯は「創価大学の章」にも書かれている通りです。第2回創大祭の折には、池田先生は、大学紛争が激しく、昭和48年、1973年開校予定を2年早めて創価大学を開校したこと、1期生、2期生は本来であるならば創価大学にいないのに入ってきたことになる、とおっしゃったんです。そして、ここに意味があると。1期生、2期生の諸君は、どうか自分が大学の創立者であると自覚をし、本気になってもらいたい。「誰でも逃げることのできない宿命がある。そこに腹を決めた時には宿命は使命となってその人の一生を輝かせていくんだよ」というお話をされたんです。まさにその通りだ。我々が若き創立者の自覚で戦うんだ。そこに創価大学の発展があるんだと池田先生から教わりました。今もこの気持ちで生きているつもりです。

そして、待望の学生歌も誕生し、大成功となった第2回創大祭の後夜祭を第1グラウンドで行ったのです。11月下旬でしたから寒かったのですが、グラウンドの中央に大きなキャンプファイヤーを組んで火を灯し、炎も相当高く上がっていましたね。1期生、2期生全員が、そのキャンプファイヤーを囲みながら肩を組んで、池田先生が手を入れて下さってできたばかりの学生歌を声高らかに歌ったんです。冬の夜空に学生歌が響き渡りました。本当にその時は我々はやったじゃないか、一つのものを成し遂げたね、という思いが全員にありました。皆が涙を流しながら、何回も何回も学生歌を繰り返して歌う。キャンプファイヤーの明かりでお互いの顔が見えるんですけれども、皆の涙が光っているんです。池田先生とともにまた頑張るんだ。この学生歌を歌いながら前進しよう。そういう息吹に溢れた第2回創大祭でした。

こんなふうに時系列で話していくと時間がなくなりますが、翌年、開学3年目に入りますと第3回入学式で初めて池田先生が公式行事にご出席されたわけです。実は第3回入学式の司会は私がやらせていただいたんです。知らない人の方が多いと思いますけれども、入学式実行委員会に入っていたので、「お前がやれ」ということで、正の司会者を務めさせてもらうことになったのです。創立者の初の公式行事へのご出席。新しい歴史の1ページになるから失敗は許されない。本番直前で体育館はほとんど参加者で埋まっている。司会席に座りながら大変なことになったなあ、かなりの緊張の高まりからか胸が痛くなったんです。それで急遽、保健室に行ったんです。「これは緊張からくる肋間神経痛だ」と言われ、湿布薬を貼ってもらい会場に戻ってきたんです。それぐらい本当に緊張していたんでしょうね。私自身は冷や汗をかきながらの司会でした。池田先生が入場されて、いよいよ本番開始。「創立者池田先生よりご指導があります」と元気いっぱいに出しました。おそらくスピーチでなく、ご指導があります、と言ったんだと思います。そして池田先生から「創造的人間たれ」という歴史的なスピーチをいただき、入学式は無事に終わりました。

第3回入学式はビデオに記録されているんですが、誰も司会者の存在には目を向けないでしょうが、司会席には私がいるんだという思いで、いつも池田先生の入場のシーンを観ているんです。

ともかく、本番当日はとても緊張していたことを覚えています。うまくやろうと思っていた自分がどこかにあったんです。とちることなく、うまく話さなければならない。完璧にという意味で、うまくやらなければ、という思いがあったんです。しかし、胸の痛みが出て湿布して戻ってきたあたりから、少し考えが変わったんです。ああ違うんだ、と。完璧にやるとか、うまくやるとか、そう思っている自分を越えなきゃいけないんだと。自分がうまくやればいいというのは低い次元の問題だ。今日は創価大学の新しい出発じゃないか。この入学式そのものが、創立者とともに新しい前進を開始する創価大学の出発の儀式となるのではないだろうか。是非ともそういう入学式にするんだ。そのお役に立てればいいんだ。少しでもお役に立ちたい。そういう思いで臨めばいいんだという気持ちになったんです。そう思うと不思議に気持ちも楽になりまして、そこで自分の殻を破ることができたように感じました。うまくやるとか、間違いなくやるとか、そういうことが問題なのではない。何のために自分は司会をやるのか。待ちに待って創立者が入学式に来てくださった。それを大成功に終わらせることが一番大事なことだ。微力でもいいから、全学生の一人としてそこに加わり、歴史を創るために責任を果たせること自体が素晴らしいことではないか。そう思えたところで、何かが吹っ切れて、より大きな目的に向かって自分をみつめることができたのです。この意味で、第3回入学式は私にとっても非常に心に残る入学式でした。

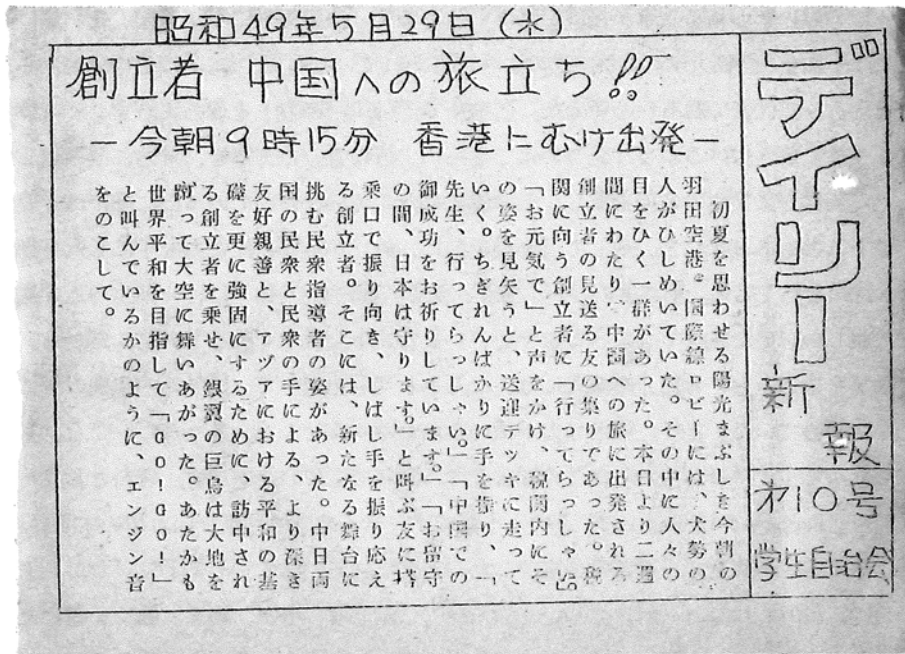
そして、4年目に入り、第4回入学式を迎えます。入学式のその日、天空広場で「1期生の集い」を開催し、池田先生もご出席してくださったのです。その時のために、『草創の誓』という、「創立者への誓い」「創価大学への誓い」「同窓の友への誓い」の3つの誓いを込めたものを、1期生の合意で作成したんです。私たち1期生は生涯、『草創の誓』のままに生きていこうと確認し合ったのです。そして、池田先生の前で『草創の誓』を朗読しよう決めていたんです。当日、先生は全員と記念撮影をしてくださり、ご指導をしてくださったんですが、結局、『草創の誓』を読むタイミングがなくて、先生が退場された後で代表が朗読し、私たちの生涯の誓いとなりました。

「1期生の集い」で、創立者はこう語られたのです。「1期生は自分が光ろうとしなくていいんです。ある意味では、犠牲になっても後輩の道を切り開いていくという“捨て石”の精神で生きていきなさい」と。これは、今も私の心深くに刻まれている言葉です。自分の屍というか、それを後輩が乗り越えていけばいいじゃないか。その道を拓けばいいんだ。それぐらいの覚悟で生きていきなさいと、創立者は私たちに語ってくれました。“捨て石”という潔い精神を胸に、徹して後輩の道を開くんだ。それが1期生の使命なんだと教えていただきました。君たちは、自分は光らなくてもいい、ただ後輩のために、大学のためにとの決心で生きていくんだよと。まさにこの精神は、初の1期生の就職の戦いにも存分に発揮されていきました。この先生のお言葉は、全てその後の人生のなかで生きていると実感してなりません。

話は卒業に関連する内容になりますが、創立者は1期生に対しては入学式にも出てあげられなかった、さみしい思いをさせた、環境も十分ではなかった、苦勞もかけた、そういう意味では何としても1期生の労苦に報いてあげたい、こういうふうな心に決めておられたのです。この先生のお心は「創価大学の章」に綴られています。私たちは、10月にはすでに卒業の記念文集『草創』を完成していました。ずいぶん早かったですね。そこには、一人ひとりの顔写真とともに、卒業

にあたっの思いあふれる文章が掲載されているんです。池田先生にも『草創』をお届けしました。先生はそれを「創価大学」の章で次のように書かれているんですね。「自分の蔵書から選んだ本を、記念として代表に贈ろうと考えた。(中略) 記念文集『草創』を傍らに置き、一人ひとりの顔写真を生命に焼き付けるように見つめた。さらに、皆の書いた文章を、丹念に読み返した。そして、選んだ蔵書に学生の名前を記し、その脇に自分の名前を書いていった。時には、励ましの一文を書くこともあった」と。そして「卒業を前に、伸一から贈られた本を手にした一期生たちは、皆、目頭を熱くした。創立者の心が、強く、強く、響いた」「伸一は、一期生の入学式には出席せず、寂しい思いをさせてしまったことを、いまだに申し訳なく感じていた。だから、精いっぱい励ましを送るとともに、卒業式には、なんとしても出席して、建学の四年間の労に報いようと、心に決めていた」と一。何名の方が頂いたかわかりませんが、ありがたいことに私も蔵書を頂戴したんです。今日お持ちしたこの洋書です。36年前に頂いた本です。資料として持ってきました。“It Happened in Boston?”という小説です。後ろの方は見えなと思いますけれども、中表紙に池田先生の直筆で「御苦労さまでした」と書かれています。その下に「わが 石井秀明君」、そして「1974. 10. 12」と日付が入っています。「創立者の心が、強く、強く、響いた」と綴られているように、ここまで一人ひとりの学生を大事にし、命を削るような思いで励ましてくださるのかと、感動と感謝の気持ちで涙がこみ上げてきました。「御苦労さまでした」との一言がどれほど私の心にしみ入ってきたことか。私にとってはどこまでやれたかわかりませんが、大切な友や後輩とともに、無我夢中で全力で大学建設に汗を流した日々が蘇ってきました。入学式にあえて出席されなかったことも、教職員に対する訓練でもあり、1期生に対する訓練でもあったと思います。そういう意味では、先生がさみしい思いをさせてしまったとご心配してくださるのは、逆に私たちの方が申し訳ない思いがするのです。池田先生が激務の中、時間をこじあげ、私たちを抱きかかえるような思いで、ペンを走らせる。おそらく、何十人という人に激励をされたんだと思います。直筆ですから書くだけでも大変な作業です。それを思うと本当にいまでも胸が熱くなります。そして、先生は1期生の名前を記しながら、心で叫び、祈っておられた。「創価大学に来てくれてありがとう。生涯、私とともに、道を開き続けてくれたまえ！自身の栄光のために、後輩たちのために、決して負けるな！」と。今、思い返しても、創立者の学生に対する心はあまりにも深いことを感じてなりません。

さて、話を学生自治会に戻したいと思います。自治会活動を通して本当にいろんなことをさせていただきました。自主講座を開設したり、全学協議会の設立に奔走したり、そして創大祭の開催、自治会新報の発刊など、全てが真剣勝負でもありましたし、楽しい青春の宝でもあります。実は、私たちが4年生の時、すなわち開学4年目に「デイリー新報」が誕生しました。大学で起こっていること、学生の活動や活躍、さらには創立者のご行動などを、毎日、広く全学生に伝えようと日刊のミニ機関誌となる「デイリー新報」を発刊したわけです。毎日昼休みに配布をするわけですから大変な作業ですが、ワクワクするような新たな挑戦でした。B5サイズの半分位の大きさでしたね。5月に創刊号を出して、その後、後輩が受け継ぎ、毎日休まず1750号くらいまで続いたと思います。毎日休まずに発行したんですから現場は大変でした。当時はワープロとか



デイリー新報

パソコンはありませんから、漢字やひらがなを1文字ずつ拾いながら印字していく和文タイプライターという機械を使いながら、文字を探して、選んで打ち込んでいくんです。はじめは骨の折れる労作業でしたが、次第にその機械を速く操れるプロが生まれてくるんですね。

その「デイリー新報」の記事の一例を紹介したいと思います。創立者池田先生は1974年の5月、正確には5月29日に記念すべき第1次訪中に出発されました。それを報道した「デイリー新報」があるはずです。1974年の5月29日。その日、私たち数名が、朝早く羽田まで取材に行きました。先生が午前中にご出発されるのを知っていましたので、いち早くその記事を昼のデイリー新報で出すんだと決めていました。これは聖教新聞より早いわけですが、絶対にやろうということで、取材陣5、6名が、前日に都内のあるお宅に泊って、翌朝早く羽田に向かいまして、現地ですばらく待つ。そして創立者ご一行が到着される。私たちは当然見えない場所に隠れながら様子を見ているわけです。創立者が羽田空港内を歩かれているところは私も確認しました。それで、創立者が飛行機に搭乗されるゲートに入っていかれることを確かめて、さらには搭乗された飛行機が無事に離陸したことを確認した直後に、公衆電話から急いで大学の自治会室に原稿を送るんです。電話で原稿を読むわけです。大学ではそれを書き留める。こうして原稿を送り、タイプして、印刷に回してその日の昼に発行できたんです。「本日、創立者が第1次訪中に旅立つ」。確かそのような見出しで、その日の朝の創立者の訪中出発が、昼にはすでに「デイリー新報」で報道されたんです。創価教育研究所の資料のなかにあつたら見つけてください。必ずあるはずです。私もその取材の一員として羽田に行きました。いい思い出となっています。

あとは自治会の活動のなかで、私にとって忘れられないのは、創立者のご次男である池田城久

さんと共に大学建設に邁進できたことです。城久さんは3期生として創価大学に入学をされました。1年生の時から学生自治会に入ってこられたんです。はじめは、記録や写真の部門を担当していましたね。それから、さまざまな活動を推進されていきました。城久さん自身は有能であり力もありましたし、情熱もありました。温かな人柄は誰からも慕われ、同輩はもとより、先輩、後輩からも深い信頼が寄せられていました。城久さんは、次第に学生自治会の中心的存在になり、大学建設に大きく貢献されていかれたのです。私が4年の時に城久さんは2年。大学院に私が行った時には、ご本人は3年、4年になり自治会では中枢を担っていました。振り返ってみて思うのですが、当時、城久さんが何を考え、何をされようとしていたのか。それは、創価大学の万年の土台を築くために、創立者に一人ひとりの学生を繋いでくださっていたと思うんです。創立者と学生の絆を、より深くより強くするのだと、人知れず心を砕かれていたに違いありません。創立者と学生一人ひとりの絆こそが、時を越えて創価大学の生命線になるのだということを考えておられたと思うのです。こういう人が中心者で頑張っている、こういうふうに苦労してやっている人がある。全部おそらく創立者にも報告をし、創価大学ではいま学生がこんな思いで頑張っています、だから心配いりません、大丈夫ですと。何人もの学生を創立者に知っていただき、大事に、大事に繋げていかれた。私もその一人だったのかも知れません。そう思えてならないのです。私だけではなく、大学建設に共に汗を流した多くの友も、同じ思いでいるに違いありません。その城久さんとともに創価大学の建設に励んだことが、忘れ得ぬ宝の思い出になっています。残念ながら創価大学の職員として頑張っておられる時、病気のため29歳で亡くなりましたが、自らの信念と青春の理想に生き抜かれた永遠の同志であると思っています。

その城久さんが、ある日、私の車に乗っている時にこういうことを言われたんです。私は皆からシュウメイ（秀明）と呼ばれていたので、「シュウメイさん、皆さんはいいですね」って言うんです。「何で」って聞くと、「皆さんは創立者のことを先生、先生と言って呼びかけながら聞えるんですよ。でも、僕にはできないんです。僕は創立者自身が父親ですから、やりたくてもできないんです」と答えたんです。城久さんご自身も、親子の関係にあるのでしょうかけれども、厳然と創立者を師匠と仰いで生きていらっしゃった。それがよくわかったんです。皆はいいねえって。先生、先生って思う存分叫びながら一緒に聞えるじゃないですか。私はそれができないんです、ということをお話された時に、僕は本当に、はっとする思いがしました。ああ、この方も同じように、私たちと同じように創立者を人生の師匠と仰いで、そして創立者の掲げる理想実現のために全てを捧げようとしているんだと。言葉にならない感動と胸に熱いものがこみ上げてきました。その城久さんと一緒に戦えたことが、私の青春の最高の宝であり、誇るべき歴史となっています。

私たち先輩は、城久さんのことを、親しみを込めて“城ちゃん”と呼んでいました。城ちゃんとは、皆と一緒にいろんな所にも行きました。ある時、夜ですが、急に思い立って横浜の中華街に行ったことがあるんです。何人かで八王子から車で行ったんです。そこで、あとで語り継がれる“シュウマイ事件”が起こったんです。中華街では店頭に肉まんやシュウマイが並んでいるじゃないですか。「このシュウマイおいしそうだね」って皆が言って、「そうだ、じゃあシュウマイ

買って食べようよ」ということになったんです。シュウマイは蒸さなければいけないじゃないですか。誰かが「生だとそのまま食べられないかもしれないぞ。店の人に聞いてみた方がいいよ」って。そしたらある人が「大丈夫だよ。食べられるよ」って言うんですよ。「だって見てみろ。ヤキウリ（焼売）って書いてあるぞ」。焼いて売っているから、食べられるはずだって言うんですね。皆も「そうだよ。よかったね」と。すると一人が「お前、それがシュウマイっていう字だよ」って。そこに城ちゃんもいたんですが、「そうかあ！」って言いながら店の前で大笑いしたことがありました。それを私たちは“シュウマイ事件”と呼んでいます。

もう一つ事件がありました。昔は軽井沢に大学のセミナーハウスがありまして、夏に皆でそこに研修をかねて遊びに行ったんです。私が大学院生の頃です。当然、城久さんも一緒です。神立さんもいましたね。若手の教員もいらっしゃいました。軽井沢には人工池があり、そこがボート場にもなっているんです。それで、ボートに乗ろうということになったんです。城久さんに「ボートに乗ろうよ」と言ったんですけど、ご本人はあまり乗りたくない様子でしたので、僕は後輩の柴田君と2人でボートを漕いで楽しんでいました。他のグループもボートに乗ってはしゃいでいました。それを見ていた城久さんが、どうも乗りたがっている雰囲気があるんです。ちょうど池の岸の所に立っていたので、私と柴田君でボートを岸に寄せて、「城ちゃん、乗りたいなら乗ってよ」と誘ったんです。ボートと岸の高さもちょうど良かったので、岸にボートをつけたんです。ご本人も乗りたがっていたので、岸からボートへ乗り移ろうと、ボートに足をかけたその瞬間から悲劇が始まったんです。これは、当然予想はできたんですけども、ボートに足をかけるということは、その動作という力でボートが岸から離れていく動きを生み出すんですね。そうすると、ご本人は片方の足を岸につけていますし、もう片方の足はボートの中に入っているわけですから、徐々に股裂き状態になっていくわけです。私は必死にボートを岸側に戻そうとして、一生懸命に手で岸を掴もうとする。不幸なことに、これがまたボートが外へ向かう動きの力になってしまったんです。私は「城ちゃんを絶対に池に落とさなきゃいけない。これは絶対にあつてはならないことなんだ」と、正義感と使命感を燃え上げながら頑張ったんです。けれども現実には冷酷なもので、いよいよ股裂き状態も限界にくる。おまけに、ご本人の体重が重たかったのもあり、ついにボートは180度回転して転覆したんです。城久さんは勢いよく池に落ちる。私たち2人は転覆ですから池に投げ出される。池の中に落ちた瞬間、ボートが覆いかぶさるように頭上に迫ってきていたので、手でぱっと止めてですね、ボートを戻したんです。そして、城久さんの方を見ましたら、腰まで水に浸かっていました。池は腰までの深さだったので、大事には至らなかったんですけど、3人とも池に落ちてしまったんです。ちょうどそこが喫茶のテラスの前だったんですね。落ちた瞬間、歓声が上がりました。喫茶店にいた人が皆、笑いながら大拍手をしているんです。その時、一人のおじさんが寄って来たんです。助けてくれるのかなあと思っていたら、「水はつめたいですか？下はぬかるんでいますか？」って、どうでもいいことを聞いてくるんです。「大丈夫ですか」と言ってくれればいいのに、と思いながらも照れ笑いをするしかありません。3人とも岸に上がって、ズボンを洗って干した思い出があります。これが“軽井沢ボート事件”です。

青春ゆえに、実にいろいろな出来事がありましたが、ただ私たちの胸にあったのは、創立者池田先生が、それこそ命を賭して、否、命を削ってまで学生の成長のために励ましを送り続け、創価大学の発展のために世界に道を切り開かれているのだという思いでした。現在では、池田先生は、世界の大学・学術機関から300近くの名誉学術称号を御受賞され、創価大学も世界各国の大学と広く交流をしています。40年前には、今日の大発展を誰も想像することすらできませんでした。そのなかで、開学当初から、もっと言えば設立構想の時から、人類の平和に貢献しゆく洋々たる創価大学の未来像が、あるいはアメリカ創価大学の構想も含めて、世界に広がる創価教育の青写真が、創立者の頭の中に描かれていたのだと思うのです。それを一つ一つ私たちに語りながら、創立者自らお手本を示されて、創価大学建学の草創の歴史を築いてきてくださった。そして今も、その先頭を走り続けてくださっている創立者がいる。その偉大な創立者のもとで、創立者とともに草創の時代を生き抜き、「捨て石」の精神で全てに挑戦し、何かを残せたとすれば、私たちにとって最高の榮譽だと思っています。

最後に、池田先生が昨年5月にトインビー博士のことを通して語られていたことをご紹介します。終わりたいと思います。いわゆる「創立者と学生の絆」という点です。トインビー博士は、学園生活を通して3つの人生の宝をつかむことができた。その筆頭にあげたのが、「創立者との絆」なんですね。博士が学んだ学園の創立者は500年前の人である。しかし、博士は自分たちに「教育」を贈ってくれた一切の原点である「創立者」に感謝を忘れなかった。はるか500年の歳月を越えて、創立者と父と子のごとき精神の絆を結べたことを大きな喜びとし、誇りとしていたと言うのです。池田先生は次のトインビー博士の言葉を紹介されました。「(創立者は、私が)奨学生に選ばれる507年前に、私のためにその準備をしてくれたのである」「彼の死の485年後に生まれたにもかかわらず、まるで生前の彼に接するかのような熱烈な直接の個人的な感謝と愛情を感じた」と。そして、池田先生は「500年の歳月を経ても、創立者と学生の間には、かくも深く強い絆が生き生きと結ばれているのである。私も創立者として、500年先、そして1000年先の未来にあっても、誇りと希望をもって、学生が学び集える学園、大学を築き上げたい⁽⁴⁾」と語られています。私たちは創立者との絆をこの大学で築かせていただきましたが、その絆を生涯にわたり強く深くし、生き生きと輝かせながら生き抜きぬいていきたいと思っています。

2011年は、創価大学開学40周年。今、私たち卒業生の姉弟である創価教育第2世代がこの場で学んでいます。もう10年ないし20年経てば第3世代が入ってきます。開学100周年は2071年。その時には、創価教育の世代は第4、第5世代へと引き継がれていくことになるのでしょう。私は、開学50周年、80周年、そして100周年へと、本学の生命である創立者の精神、創立者と学生の絆が、学生にどのように継承され、語られていくのか、これが一番大事なことだと思っています。トインビー博士のように、はるか500年前の創立者に感謝し、感動し、その精神と理想に向かって生き生きと学問に励み、民衆に奉仕し、人類社会の平和に貢献する逸材を輩出していく大学にしなければならない。そして、池田先生の人間主義の思想と哲学を、社会精神、時代精神にまで高めて

(4) 「5. 5 記念代表者会議での名誉会長のスピーチ」『聖教新聞』2009年5月11日 3面。

いくことが私たちの責任であり使命であると思うのです。

今、私たちは、創立者の声を直に聴き、直接話しかけていただき、創立者の行動を目にしながら、創立者の精神を学び深めて人生の原点をつくることができます。本当に幸せであり、これほどの栄誉と誇りはありません。創大なら4年間、短大なら2年間、創立者のもとで深い慈愛を受けながら、最高に価値ある生き方と人間を鍛え上げることができるのです。その意味で、私たちを含め、現在学んでいる学生たちが、その姿と生き方を通して創価教育の次世代へと真の創立者の精神を伝えていかなければならないと痛感しています。私たちが学生時代に結ぶことができた創立者との絆は、まさに生命と生命、魂と魂の結合のなかで生まれたのだと思います。創価教育の理想実現を担う創価大学、創価女子短期大学の永遠なる発展の生命線、それこそが時空を越えた魂の結合である“創立者と学生の絆”であると思います。私自身、今再びこうした決意に立って、学生に尽くし抜き、創立の理想実現を目指して一生懸命に頑張っています。長い時間、ご静聴ありがとうございました。